科目名	病原体検査学演習	分野・必選別・単位数	専門科目（臨床検査技術学）	選択	2単位

科目責任者	◎教授 鈴木幸一 教授 後藤一雄 准教授 松村 充 教授（兼） 槇村浩一					科目ナンバー	T4C114
課程	博士前期	配当年次	2年	配当学期	通年	授業方法	演習

授業の概要	各種の感染症の病因・病態に関わる教育、研究を行い、感染症における病原体の迅速な検出方法、とくに院内感染制御や食品衛生における感染制御における問題点と微生物の早期検出方法の開発、改良の方向性、加えて現行の感染症法のもとでの病原体検査について留意すべき事項が適切に議論できることを目指す教育を行う。
授業の到達目標	①さまざまな院内感染発生事例について菌株（strain）同定（タイピング）や薬剤耐性評価がどのようになされるかを調査できる。 ②実際の細菌・ウイルス感染発生時の菌同定のための迅速法をサーベイできる。 ③院内感染制御や食品衛生における感染制御における病原体同定方法の問題点と改良の方向性を説明できる。 ④PCRやパルスフィールドゲル泳動法による菌同定法の改良点を説明できる。

授業計画

回数	担当者	行動目標
1	鈴木 幸一 教 授	行政上の感染症サーベイランスについて概説でき、有効な方法と問題点について概説できる。
2	鈴木 幸一 教 授	海外諸国とくにアジア各国の感染症対策を概観したうえで、グローバルな病原体の分布、伝播経路を調査できる。
3	鈴木 幸一 教 授	国内に常在しない病原性微生物の検疫体制を説明でき、国内への侵入が想定される病原性微生物が検査できるようにする準備状況を調査できるとともに、そこで用いられる検査方法を実施することできる。
4	後藤 一雄 教 授	微生物病原性研究における動物モデルの活用から得られた知見および技術を臨床検査への応用可能性ならびに問題点を説明できる。①
5	後藤 一雄 教 授	微生物病原性研究における動物モデルの活用から得られた知見および技術を臨床検査への応用可能性ならびに問題点を説明できる。②
6	後藤 一雄 教 授	微生物病原性研究における動物モデルの活用から得られた知見および技術を臨床検査への応用可能性ならびに問題点を説明できる。③
7	後藤 一雄 教 授	微生物病原性研究における動物モデルの活用から得られた知見および技術を臨床検査への応用可能性ならびに問題点を説明できる。④
8	槇村 浩一 教授（兼）	さまざまな院内感染発生事例についてstrain同定や薬剤耐性評価がどのようになされるかを調査できる。①
9	槇村 浩一 教授（兼）	さまざまな院内感染発生事例についてstrain同定や薬剤耐性評価がどのようになされるかを調査できる。②
10	槇村 浩一 教授（兼）	実際の細菌・ウイルス感染発生時の菌同定のための迅速法をサーベイできる。①
11	槇村 浩一 教授（兼）	実際の細菌・ウイルス感染発生時の菌同定のための迅速法をサーベイできる。②
12	松村 充 准教授	院内感染制御や食品衛生における感染制御における病原体同定方法の問題点と改良の方向性を説明できる。PCRやパルスフィールドゲル泳動法による菌同定法の改良点を説明できる。①
13	松村 充 准教授	院内感染制御や食品衛生における感染制御における病原体同定方法の問題点と改良の方向性を説明できる。PCRやパルスフィールドゲル泳動法による菌同定法の改良点を説明できる。②
14	松村 充 准教授	院内感染制御や食品衛生における感染制御における病原体同定方法の問題点と改良の方向性を説明できる。PCRやパルスフィールドゲル泳動法による菌同定法の改良点を説明できる。③
15	松村 充 准教授	院内感染制御や食品衛生における感染制御における病原体同定方法の問題点と改良の方向性を説明できる。PCRやパルスフィールドゲル泳動法による菌同定法の改良点を説明できる。④

事前事後学修の内容およびそれに必要な時間	【事前学修】	次回授業部分の資料を事前に読んでおくこと。 次回の授業内容を予習し、用語の意味等を理解しておくこと。
	【事後学修】	授業中の疑問点をまとめ、関連する文献等を利用し、次回授業までに解決しておくこと。
	【必要時間】	当該期間に30時間以上の予復習が必要。

教科書	随時指示する。
参考書	随時指示する。
成績評価の方法および基準	レポート50%、口頭試問50%
その他履修上の注意事項	試験やレポート等に対し、講義の中での解説等のフィードバックを行う。 カリキュラムマップのDP2が、この科目と本専攻の学位授与方針との関連を示している。